

## 「フロックコート」の行方(II)

酒 井 英 行

同一の素材を繰り返し語る、というのが、百閒文学の一つの特徴である。

「フロックコート」(『百鬼園隨筆』三笠書房、昭8・10)の題材も後に繰り返し語られるわけであるが、その系譜の作品において、その題材が、同じ縁縁のなかで、同じ道筋によつて語られているわけではない。テーマが異なる別の作品を書けば、「フロックコート」の題材も異なる文脈のなかにはめ込まれるのは当然である。百閒自身、「所謂ニユース又は話の種を伝へるのではない」「つはぶきの花」、『つはぶきの花』筑摩書房、昭36・2)と言うように、百閒の作品は、現実の出来事そのものを客観的に正確に再現することを目的に書かれているわけではない。表現したいテーマを効果的に表出するために、そのテーマにふさわしい切り口で現実の出来事を切り取ったり、場合によつては現実の出来事を変形させているのである。

したがって、それぞれの作品において、同一の素材が異なった相貌をして立ち現れてくるのであり、その素材が担う意味も異なっているのである。

さて、「フロックコート」の系譜の作品群を一覧表にしてみよう。「フロックコート」の題材を三つに分解して、陸軍士官学校の入校式当日に教室で転倒する話を(a)、その後日譚を(b)、海軍兵学校(海軍機関学校)を視察してその玄関で転倒する話を(c)とする。その話を内包している場合には○印、内包していない場合には×印で表す。(a)、(b)、(c)そのものではないが、それらに関わりのある話を内包している場合には△印を付す。

	「門衛」(『凸凹道』三笠書房、昭10・10)	×	×	○	(a)				
	「海軍機関学校今昔」(『隨筆新雨』小山書店、昭12・10)	×	×	×	(b)				
	「つはぶきの花」(『つはぶきの花』筑摩書房、昭36・2)	○	○	○	(c)				
	「御慶十年」(『けぶりか浪か』新潮社、昭37・7)	×	×	△					
	「山むらさきに」(同)	×	×	○					
	「忘却論」(『波のうねうね』新潮社、昭39・8)	○	○	×					
	「漱石生誕百年の御慶第十五」(『麗らかや』三笠書房、昭43・1)	○	×	×					
	「新涼談義」(『残夢三昧』三笠書房、昭44・11)	○	○	×					
	「ノコリノコらず」(『日没閉門』新潮社、昭46・4)	×	×	○					

この一覧表から見て取れることを一つ記しておく。「門衛」と「海軍機関学校今昔」は、比較的、「フロックコート」に接近して書かれているが、その他の作品はかなりの年月を隔てて書かれているのである。「海軍機関学校今昔」と「つはぶきの花」の間には、二十年以上もの歳月が流れているのであり、「フロックコート」の系譜の作品群は主に百間の晩年に繰り返し書かれているのである。このことの意味は他の機会に考えてみたい。

\*

「フロックコート」の（その一）の行方を追ってみよう。

「つはぶきの花」のなかの「羽筆の水」「くりくり坊主」↓「御慶十年」↓「忘却論」↓「漱石生誕百年の御慶十五年」↓「新涼談義」がその系譜である。

これらの作品群で先ず問題にしたい点は、「私」が陸軍士官学校の入校式に行った日にちである。「フロックコート」では、漱石が亡くなった、「その九日の朝」行った、と書かれている。これらの作品群ではどうか。

それ（漱石の臨終・筆者注）が十二月の九日で、その晩も私は家へ帰らなかつた。さうしてその翌日十日は陸軍士官学校の新入生徒入校式の当日であつた。

（「羽筆の水」）

漱石先生が亡くなられた十二月九日の翌日の十日が第三十期かの新入生徒の入校式だったので、休むわけには行かないから、一晚徹夜した夏目家から士官学校へ出掛けた。

（「忘却論」）

陸軍士官学校教授に任官し、陸軍教授になつた年で、御臨終の十二月九日の翌日、十二月十日がその年度の新入の士官候補生の入校式の当日でありました。

〔漱石生誕百年の御慶第十五年〕

「御慶十年」には後日譚に関わる記述のみ。「新涼談義」には入校式の日についての記述は無い。「フロックコート」の後に書かれた作品で、入校式の日についての記述のある作品では、入校式は全て臨終の翌日、十二月十日ということになっているのである。漱石の臨終の「前」から臨終の「後」に書き換えているのである。後になって、「フロックコート」の記述の誤りに気付いて、日にちを改めたのであろうか。そうではあるまい。

「フロックコート」は曖昧な記憶に頼つて書かれた作品とは思われない。(一)で述べておいたように、大正五年頃の陸軍士官学校の入校式は、十二月一日に固定されていたのである。この固定されていた十二月一日を忘れた、とは考えられない。それでいて、「先生の容態が一寸その式に行つて来る位の間なら、急変もなからうと云ふお医者言葉を頼みにして」という臨場感のある状況説明まで加えて、入校式を十二月九日に行っているのである。転倒による動転の激しさを強調する効果的な方法が、十二月九日の入校式の仮構だったのである。つまり、「先生の容態が一寸……」という切迫した不安な状況を仮構して、転倒による動揺の激しさを増幅させているのである。

厳めしい出で立ちで入校式の日には転倒した、という題材を内包する後続の作品群において、一体、何故、入校式の日を全て統一して十二月十日に変更したのであろうか。数年ずつ隔てて書かれたこれらの作品における十二月九日の「翌日」が入校式という共通した記述には、単なる日についての記憶の問題ではない、ある表現意図が窺われるであろう。つまり、入校式が行われたのが十二月一日であることを明確に記憶していながら、あることを表現するために、漱石の臨終の「翌日」であったと記しているのである。百閒にとつて、漱石は、絶対的な神のような存在であった。日記に、「先生

が死んだのは嘘の様な気もする。もう一年過ぎた。私は先生の弟子であつた思ひ出を粗末にすまい。」(大正六年十二月七日)と記す百閒。漱石の死から三十五年経つた六十二歳の時、「どういふふうな人つて、私なんかには絶対的のもですね。」「どうも、批判も何もありませぬね。」「漱石をめぐつて、『新潮』昭26・6」と発言する百閒。永遠の絶対的な弟子であつたのだ。永遠の弟子を自認する百閒が、「十二月九日」の朝入校式に行つた、つまり、垂死の漱石の側を離れた、というのは具合が悪いのだ。「先生の亡くなられる前の晩から、病室の隣りの部屋で徹夜し、亡くなられた晩も引き続いて徹夜し」(「漱石生誕百年の御慶第十五号」)——漱石の死に寄り添つていた自己を作品のなかにこそ留めておきたかつたのだ(現実の百閒が、九日の夜も漱石山房で徹夜したか否かは今のところ確認出来ないが、八日の夜漱石山房で徹夜し、引き続き漱石の死まで漱石山房に留まつていたことは事実であるのだが)。

その日は大病院で先生の遺体を解剖する事になつてゐた。お葬ひの前に「たん先生の遺体がお家の門を出て行く。その騒ぎを後にして私は士官学校の校門をくぐつた。」

(「羽筆の水」)

念には念を入れ、だ。漱石の遺体が門を出て行くまで漱石の側に寄り添つていた(漱石山房を離れるのは、漱石の遺体が門を出る時)永遠の弟子たる自己を作品に留めているのである。陸軍士官学校の入校式を十二月十日にずらすことで、漱石の死に寄り添う自己を信憑性を持たせて作品に留めることが出来たわけである。しかし、信憑性を持たせる、ただそれだけのために、現実には十二月一日に既に行われていた入校式を十日に仮構したわけではあるまい。「フロックコート」の後続の作品において、入校式を十日に仮構した真の意図については、後に考察したい。

\*

「つばぶきの花」は、「阿里山の霧雨」〜「くりくり坊主」の十四篇の連鎖形式の作品であるが、「獵虎の襟巻」以下の十篇は漱石の思ひ出（および、それらにまつわる私事）を綴っているのである。そのなかの「羽筆の水」と「くりくり坊主」の前半は、「もうすでに四十何年昔の思ひ出」になった、漱石の臨終前後の回想記である。「羽筆の水」が、「大正五年十二月、漱石先生病篤しの知らせに私共は度を失った。」と書き起こされ、「くりくり坊主」の前半が、「漱石先生を失った悲しみは勿論その中のどれにも劣らない。ただ年月がいつとはなしにその悲しみを遠くへ隔てて、もうすでに四十何年昔の思ひ出になった。」と締め括られていることから分かるように、これらは、漱石を失った動揺と悲しみを主題にした回想記なのである。したがって、「羽筆の水」「くりくり坊主」では、陸軍士官学校で転倒すること自体にテーマが置かれているわけではない。

その九日の朝は、当時私の奉職してゐた陸軍士官学校の、第卅期新生徒入校式があるはずになつてゐた。さういふ儀式の八釜しい学校ではあるし（中略）早稲田南町の先生の家から、十分もかからない近くにある士官学校に出て行つた。

（「フロックコート」）

さうしてその翌日十日は陸軍士官学校の新生徒入校式の当日であつた。

私はその年に陸軍教授に任官し、陸軍士官学校の教官であつた。大切な行事の入校式を、先生が亡くなられたからと云ふ理由で抜けるわけには行かない。（中略）混雑してゐる夏目家から市ヶ谷本村町の陸軍士官学校へ出掛けた。

（「羽筆の水」）

九日と十日の違いを除けば、ニュース機能面では同じ文章である。しかし、「私」の陸軍士官学校（の入校式）との関わ

り方においては距離があるのである。

「フロックコート」の「さういふ儀式の八釜しい学校ではあるし」という表現には、自己を士官学校の部外者の位置に置いて、士官学校の硬直した権威主義、形式主義を批判しようとする姿勢が見られるのである。(I)で述べたように、「フロックコート」(その二)は、無様に転倒するという自己の失敗を鏡にして、陸軍士官学校の体質を批判している作品である。

それに対して、「羽筆の水」の「大切な行事の入校式」という表現はどうか。自己を士官学校の部外者の位置に置こうとする姿勢が見られないのだ。むしろ、士官学校に一体化し、士官学校の一員になりきっているのである。「士官学校では廊下は戸外に準ずる事になってゐるので、教官室を出ると同時に頭に山高帽子を乗せ、靴音を立てて威張つて講堂に近づいた。」という表現にも、自ら、陸軍士官学校の権威主義、形式主義の体現者になりきっていることが窺われるのである。つまり、「私」は、陸軍士官学校の規律を当然のこととして忠実に遂行しているのだ。「フロックコート」の、「軍隊では、廊下は野天と心得るのださうで」といった、陸軍士官学校の体質を御苦労なことにも勿体ぶつて、と批判する姿勢は見られないのである。

陸軍士官学校の体質に同化している「私」を描いている「羽筆の水」「くりくり坊主」では、「私」の無様な失敗を鏡にして士官学校の生徒の硬直を映し出して、それを批判するという意図は強くないであろう。「気をつけ」の号令をかけた生徒に対する「その教室に近づいただけで、あわてなくともよささうなものだけだ」と「フロックコート」という揶揄も、「羽筆の水」では姿を消しているのである。規律に異様なまでに忠実で、融通のきかないロボットのような生徒が描かれていることは確かだが、それは批判の対象としてではなく、おかしさを誘うものとして描かれているのである。

「フロックコート」の(その一)は次のように結ばれている。

その生徒は、お汁粉を頬張つてゐた箸を止めて、私を正視しながらいつた。「私共は、他人の失敗を見て笑ふのは、いけないことだと教はつてをります」

「くりくり坊主」では、この話材を二分割して、共鳴するように描いているのである。

お汁粉を御馳走してやると、大きなお椀で立て続けに三杯たひらげた。しかし三杯目には少し妙な顔をしてゐる。よくそんなに一どきに食べられるものだねと云つたら、「食へと云はるるから戴きました」と澄ましてゐる。

君等は一体ああ云ふところを目の前に見て、可笑しくもないのかね、と云ふと、「人の失策を見て笑つてはならぬと教はつて居ります」と答へた。

言われた通りに行動する、言われた通りにしか動かない生徒の硬直ぶりが増幅されて、批判の対象にされているかのように見える。しかし、作品の前からの流れのなかにこの二つの話材が共鳴するように並べられると、これらは笑いしかもたらないのだ。作者の計算である。入校式の当日転倒する話、その後日譚それ自体は面白おかしく語れば事足りるのである。先程述べたように、「獵虎の襟巻」以下の「つばおきの花」は漱石の回想記である。陸軍士官学校での出来事および後日譚といった私事そのものを語ることは主目的ではないのだ。夏目家から士官学校へ歩いて行つたか、人力車で行つたかさえ分らないほどにうわの空であつたとも記しているように、漱石を失つた動揺、悲しみを語りたかつたのだ。

要するに漱石先生の事で逆上し、すつかり上ずつてゐたから、どこかがお留守になつてそんな失敗をしたのだらう。陸軍士官学校で転倒する話の位相が端的に示されているであらう。転倒する話は漱石を失つた動揺、悲しみに完全に従属しているのである。無様に転倒するほど漱石のことに気を奪われていたのだ、と言っているのである。転倒したことは、漱石を失つた動揺、悲しみを強調するための手段に使われているのである。十二月一日に既に行われていた入校式を十日



に練り下げた真の意図である。

「フロックコート」では、後日譚は、陸軍士官学校（および生徒）の硬直を描くために不可欠な話材であったのだが、「くりくり坊主」では、無様な転倒を描いた後に後日譚を書き加える必要性は無いのである。必要性の無い話材を、しかも、「フロックコート」より分量も多く書くところに、百間の晩年の創作態度の一つの特徴が現れているのである。ゆつたりと構えて、寄り道をして遊びながら書き進んでいるのである。初期の作品である「フロックコート」では、作品のテーマに沿った話材にしほって、道草を食わずに生真面目に描いているのである。

「フロックコート」と「つはぶきの花」で、夏目家を出てから無様に転倒するところまでの描写に費やされた分量はほぼ同じである。しかし、無様な転倒に直接的に関わる部分だけの分量では、「フロックコート」の方がかなり多いのである。入口から教壇に向かふ通路の両側に、気をつけを喰った生徒達は石の如く硬直し、何年来さうして起つてゐるかの様に、静まり返つてゐた。私は、入口で脱いた帽子を片手に持つて、静静と教壇に向かつて行つた。（中略）私はその方に向かつて厳肅なる歩みを進めた。前列の生徒の正面を通るのである。生徒達は、白ら白らと真ともを向いて、何処を眺めてゐるのだから解らないけれど、何か知らし一点を、氣絶する一寸前の如くに見据えてゐるのである。

（「フロックコート」）

生徒はそつちへ向かつて、這入つて行く私の方に背中を向けた儘、石の杭を列べた様に固くなつてゐる。

その列の間の通路をコツコツと歩いて教壇に近づいた、  
（「つはぶきの花」）

どういう点で「フロックコート」の關係箇所が膨らんでいるかは明白であろう。生徒と「私」双方の硬直ぶり、厳めしさを律儀に強調しているのである。笑わせよう、とする作者の手の内が透けて見えるのだ。百間は、「中村武志著『埋草隨

筆』ノ序」(『無伴奏』三笠書房、昭28・5)において、「書イタ物ガ面白イノデナク、面白イ物ヲ書カウトスルノハ、自分ノ目ジルシヲ見馴レタ私カラ云ヘバ邪道デアル。」と言っている。「フロックコート」から二十年後の言である。この創作態度から見れば、「フロックコート」の表現はまさに「邪道」と言う他ないのだ。「面白イ物ヲ書カウトスル」創作態度でしかないのである。「つはぶきの花」が「書イタ物ガ面白イ」ような作品になりえているか否かの品評はしないが、「フロックコート」よりすつきりとした、力まない表現であることは確かである。

\*

「フロックコート」(その一)の系譜の他の作品を見てみよう。

「忘却論」は(上)(下)から成る作品であるが、「フロックコート」(その二)に関わる(上)に絞って論を進めよう。「長年学校の教師をしてゐたので、たまには先生みたいな顔がして見たい。」と、肩肘張らないユーモラスな語り口で、自分が勤務していた学校の生徒について語りだすのである。

昔、先生稼業の手始めに陸軍士官学校の教官を何年かやつたが、あの学校の生徒の教室内のお行儀は申し分ない。石の杭を列べた様に静かで、きちんとして、にこりもしない。

その具体例として、入校式当日に転倒する話とその後日譚が語られるのである。「フロックコート」の関係箇所の四分の一程度、「つはぶきの花」の関係箇所の五分の一程度の字数で、ニュースを伝えるように語っているのである。出来事に意味を与えたり、主観的判断を表に出したりしないのである。

踏み台に足を掛け、上に上がらうとしたら、踏み台が引っくり返つたので、私は自分の身体の重みで踏み台の木箱

を跳ね飛ばし、そのはずみでフロックコートの裾を乱して仰向けに顛倒した。

「フロックコート」や「つはぶぎの花」とは異なつて、転倒を漱石の死に関係づけてはいないのだ。危篤の漱石の側を離れて来ている切迫感のために、転倒した動揺が激しかったのだとか、漱石の死によるショックと疲労のために転倒したのだとか、そんな意味づけはしてないのである。漱石の死には、ニュース報道に不可欠な「何時」という以上の意味は与えられていないのだ。「私」が転んでも、「何事もなかつた様にしんとしてゐる」生徒、「他人の失敗を見て、笑つてはいかんと教はつてゐる」と言う生徒を表立つて批判しているわけでもない。「フロックコート」の「何がどうなつたのだから、私には少しもわからなかつた」といったおおげさな表現も影を潜めているのである。つまり、「忘却論」(上)における転倒にまつわる箇所は、「フロックコート」や「つはぶぎの花」のストーリーの要約に過ぎぬ、と言つても過言ではないのだ。言わば、ニュース報道と大差のない文章である(作中の出来事が事実か否かを言っているわけではない)。

それでは、「忘却論」(上)全体がニュース報道のように味も素つ気も無い作品かというところ、それは違ふ。陸軍士官学校の生徒が、「きちんとして、にこりともしない」例として転倒する話を語つた後に、「士官学校の生徒は教室内でにこりともしないと云つたが、にこりどころではない例もある。」と話題を転換して、「蓄へてゐた鼻の下の髭をきれいに剃り落し」て教壇に立つた話を語り始めるのである。

その瞬間、起立してゐる彼等全体の容積が倍にもふくれた様な感じがしたと思つたら、全員の顔が真赤になり、声を揃へてぼうつと吹き出した。こらへ切れず、止むなく破裂した様である。

力こぶを入れた、笑わせてやろうとする凝つた文章というわけではない。「フロックコート」の「私」が転ぶ箇所ほどの厚化粧ではないのである。髭にまつわる話を語つた後で、「さう云ふ特例は別にして、彼等は実におとなしい。いつでもきちんと姿勢は正しく、教師たる私の方に真直ぐに向いて、身動きもしない。」と、話を出発点に揺り戻したかに見せてお

て、直ぐ様、「まともにこつちを見てみると云ふのが、しかし不馴れな教官の勘違ひであつて、生徒の方では両眼を見開いたまま居眠りをしてゐるのである。」と、どんでん返し of 意外な展開を仕組むのである。「忘却論」(上)には、笑わせようとする凝つた表現は見られないが、悠揚迫らざる作品の流れがかもし出す洗練されたユーモア感覚が作動しているのである。

「忘却論」(上)はこの後、陸軍士官学校との対比で、「私立大学の予科」の学生との出来事を語るのであるが、一貫した話題、教師としての「私」および生徒について語っているのはここまでである。作品はこの後、連想ゲームのように横滑りしていつて、話が拡散しているのである。百閒晩年の練達した文章道の一面である。ひとつの塑像を律儀に造形していく生真面目さは最早無い。この生真面目さと引き換えに鷹揚な境地に達したわけであるが、これは締まりの無さとも言わざるを得ないのである。

「漱石生誕百年の御慶第十五号」は、総じて、御慶ノ会の会場でのスピーチという建て前の作品である。「フロツクコーナー」(その一)に関わるのは、その(四)であるが、そこは今回の御慶ノ会の新顔である夏目純一を出席者に向かつて紹介するために述べられている箇所である。

夏目純一をこの会に初めて招待したのは、今年が漱石生誕百年という記念すべき年であるからだ、ということと言外に言い、漱石生誕百年イコール死後五十年ということで、漱石の臨終の回想から話を進めるのである。したがつて、漱石の回想記であつた「つはぶきの花」と同一の趣を呈するのは当然である。純一を紹介するための枕であるために手短かに語っている点が違うだけである。「先生の亡くなられる前の晩から、病室の隣りの部屋で徹夜し、亡くなられた晩も引き続いて徹夜し、ふらふらになつてゐたが、新入生徒の入校式と云ふ大切な学校の行事ではあり」と、陸軍士官学校への違和を消去して、漱石の死に寄り添つていたことを前景化させているのである。

新入生徒の待ち受ける講堂へ這入り、講壇に上がらうとした途端、足もとを踏みちがへて、大勢の見てゐる前にフロック・コートの裾を乱して顛倒した。連日の惑乱の結論の如きもので、後から落ちついて考へて見ても、止むを得なかつたと云ふにとどまる。

無様な転倒は笑いのための話材ではない。漱石の死に寄り添った「惑乱」と疲労を強調するためにだけ用意されているのである。漱石の絶対的な弟子であることだけを伝えようとしているのだ。後日譚がここで不要であることは言うまでもないであろう。

肩肘張らない淡々とした語り口という点では、「忘却論」に似ているであろう。転倒する話を語った後で、「純一さんはまだ小ひさくて」と、純一を紹介する本題に話を戻し、微笑ましいエピソードを一筆絵のテクニクで述べるのである。危なげのない展開で、熟練した文章道である。

最初に示した表で、「御慶十年」の(b)欄に△印を付しておいたように、「御慶十年」は厳密に言えば、「フロックコート」(その一)の系譜の作品ではないのである。「御慶十年」の「三 御慶の系列」は、御慶ノ会の出席者と自分とのつながりを、学校関係、国鉄関係、ジャーナリズム関係、宮城道雄関係に分けて述べている所である。そのなかの学校関係者とは全て法政大学の卒業生であり、陸軍士官学校その他の軍人の学校の生徒とは学校以外ではまるで関係ない、と自ら述べているのである。したがって、陸軍士官学校の生徒のことは本題には必要なのである。本題から外れた陸軍士官学校の生徒のことを、「私」の家の正月の雑煮の仕来りまで添えて、かなりの字数を費やして語っているのである。このような創作態度は、「くりくり坊主」のところで述べておいたように、百聞晩年のひとつの特徴である。

なぜそんなに何ばいも食ふのだ、と聞いたら、お椀と箸を前に置き、両手を膝に揃へて、はい、食へと云はるるから、食ひましたと云つた。

陸軍士官学校の生徒の、言われた通りにしか行動しない融通のきかなさを論うには持つて来いの素材である。しかし、ここはおめでたい御慶ノ会である。「遠い昔のさう云ふ薄れた記憶が、年年の御慶の目出度いお酒の味をおいしくする。」といった、新春を寿ぐ言に運ばばいいのである。したがって、雑煮にまつわる話も、政法大学の学生との対比で、「軍人の生徒にはこんな可愛いのもゐた。」と位置付けられているのである（やんわりとした揶揄であることも否定できないのであるが）。

「新涼談義」には陸軍士官学校での転倒も後日譚も出揃っている。まさに、「フロツクコート」(その一)の系譜に連なっているのであるが、これは戸板康二との対談であり、次元が違うのである。戸板が作品世界と現実世界を同一のものとして質問しているのに答えているのである。つまり、百閒が陸軍士官学校の教室で転倒し、生徒が後日「人の過失を見て笑つてはいけないと私どもは教はつてゐます」と言つたことを現実の事実だとしているのである。これらが現実の事実ではないとする根拠は示せないが、私の印象として、両方ともが現実の事実であつたとはどうてい思えない。それはさておき、人は誰しも多かれ少なかれ演技者であるのだが、百閒の場合には、演技者の面が強かつたのだと考えられる。変人、奇行の持ち主という他人が貼つた商標を自ら誇張して演じる、といった傾向が見られるのである。作品に面白おかしく描いたことを自己の現実だと振る舞うことで、その商標を自己増殖して、世に流通させてゆく、それをまた作品に書く、……。

\*

「フロツクコート」の(その二)の行方を追つてみよう。

「門衛」↓「海軍機関学校今昔」↓「山むらさきに」↓「新涼談義」↓「ノコリノコらず」がその系譜である。

「門衛」は、百閒と黒須教授（海軍機関学校で芥川龍之介と同僚教官であつた黒須康之介）との對話形式の作品である。「門衛」という題名に沿つて、共通性のある三つのエピソードで組み立てているのである。芥川と黒須が海軍兵学校の門衛所で下手に出たために門衛から高圧的に扱われた話、（門衛と直接的には関係ないが）百閒が海軍兵学校の女関で転ぶ話、百閒が陸軍士官学校の門衛に高圧的に扱われた話の寄せ集めである。寄り道をしないで、既定のことだけを律儀に語っていくという初期作品らしい書きぶりである。

相手を弱者と見る、あるいは相手が下手に出ると高圧的になる兵学校や士官学校（の門衛）の権威主義は描かれてはいないが、それを批判することがこの作品のテーマではない。

「内田さんが兵学校に出張して、頗る怪我をされたのは、あれは何年でしたか知ら」と云つて、黒須教授は面白さうな顔をした。

「門衛」の主題がここに端的に現れているのである。面白い話をして、読者を笑わせるのがこの作品のねらいである。「フロックコート」（その二）に関わる部分に絞つて見てみよう。「うつつかりして日曜日に学校の視察に出かけたものから」と自身の兵学校行きの落ち度を前提にして語っているのである。

「前略」いい工合に向うから水兵が一人やつて来ましたので、おいと云つて呼び止めると、起ち止まつて敬礼しました。（中略）また水兵が敬礼しました。それで私も答礼を与へて歩き出しましたが、あんまり向うが丁寧にしてくれるので、つい私の方にはずみがついて、非常に威張つたやうな気持で玄関にかかつた時、足許がお留守になつてゐたと見えて、躓いて前にのめつた拍子に、花崗岩の踏段で顔を打つて血が出たのです」

「うつつかりして」、「つい」——徹頭徹尾、「私」の独り相撲なのである。状況から強制されていないのに、単なる迂闊なミスとして、日曜日に視察に行つたり、「非常に威張つたやうな気持」で歩いているに過ぎないのである。対決すべき状況

の不合理的があるわけではない。批評、思想を描きようがないのである。迂闊なミスによる無様さのおかしさでしかない。軽く、明るい笑いである。「フロックコート」(その二)が再生産されているのである。

「門衛」という作品は、黒須から聞いた芥川の思い出をまとめた「芥川教官の思ひ出」(『凸凹道』)の中にある、芥川と黒須が海軍兵学校の門衛にぞんざいに扱われる話と、「頤から血を出した事は百鬼園随筆の中に心覚えを記しておきましたけれど」と言っているように、「フロックコート」(その二)とを組み合わせることによつて成立しているのである。比較的接近した時期に、同一の素材を繰り返す安易さが見られるのである。

しかし、芥川と黒須が下手に出たことを窘め、自分はその辺りの呼吸はよく知っていると先輩面をしておいて、自身の、水兵を高圧的に「おい」と呼び止め、威張つて歩いた挙げ句の無様な失敗を語り、「威張るのはいいけれど、はずみがつくと、あぶないですね」と結ぶ展開には妙味があり、軽い作品ではあるが、忘れ難い作品である。

「ノコリノコらず」は、「門衛」から三十数年もの時を隔て、「門衛」とほぼ同一の素材で書かれた作品である。「ノコリノコらず」の(一)は、「芥川教官の思ひ出」や「官命出張旅行」(『凸凹道』)で既に書いていた、芥川と黒須が江田島の兵学校に出張した途中に、奈良の宿屋に泊り、芥川が襖の絵を褒めちぎったが、翌朝見たら、それは雨漏りのしみであったという話を中心、(二)は、芥川の影響で黒須が作った俳句をめぐる話(この作品の題名は、黒須の俳句「竹ノコのノコリノコらず竹になり」から取られている)、(三)は、芥川と黒須が海軍兵学校の門衛に高圧的に扱われた話と「私」が海軍兵学校の支関で転んだ話との抱き合わせである。つまり、「フロックコート」(その二)の系譜に連なるのは(三)であり、「門衛」にはほぼ重なるのである。

私が、うなづいて歩き出すと、水兵は敬礼をした。さうして、私は威張つたままの歩調で、教はつた通りに行くと、広い芝生の向うに、大きな白い石造の建物が見え出した。廃墟のやうな東京から出て来て眺めた目には、丸でお伽噺



の国の殿堂のやうに思はれた。その建物の壮麗な感じが私に乗り移つて、私は益偉いやうな心持になり、人つ子一人  
ゐない静まり返つた広場を闊歩して、堂堂たる玄関にかかり、一足踏み入れた時、私はばたと俯伏せに倒れて、花  
崗岩の階段で顎を打つた。

〔「フロックコート」〕

水兵の敬礼にはずみがついて、大威張りに本部の玄関前に来た時、靴の裏の泥を落とす為の金網の縁に足の先を引  
つかけ、前にのめつて花崗岩の石段にいやと云ふ程顎をぶつけた。

〔「ノコリノコらず」〕

出来事そのものだけ見れば、ほぼ同じであろう。「フロックコート」を要約すれば、「ノコリノコらず」になるであろう。  
初期の作品「フロックコート」では、「私」が「大威張り」に歩く様を言葉尽くして描写しているのである。次のプロッ  
ト、無様に転ぶこととの落差を最大限に出すために、力瘤を入れて、敵めしい歩行を描いているのである。つまり、事柄  
そのものの持つ面白さを伝えようと努力しているのだ。ところが、最晩年の「ノコリノコらず」では、事柄そのもののデッ  
サンはあつきりしているのである。「どこをどううついたかよく知らないが、その挙げ句、やつと江田島海軍兵学校の門  
前にたどり着いた。」「何を視察し、どんな調査を試みたのか知らないが、先づ先づそれで海軍兵学校出張の役目は果たし  
たのだらうと思ふ。」と、芥川・黒須の視察を見下ろしたように貧相に語つておいて、それとの対比で、「私」の堂々とし  
た視察を語ると見せかけ、その実、日曜日に行き、おまけに無様に転ぶという失敗を語り、それでいて、「そこいらをい  
加減に見て廻り、陸軍からの出張の大任を果たした。」と締め括るのである。事柄の持つ面白さではなく、作品の流れ、語  
り口の面白さで勝負していることが分かるであろう。

「海軍機関学校今昔」、「山むらさきに」はほぼ同一内容の随筆であり、自分と海軍機関学校との関わりを、海軍機関学  
校への親愛の情を込めて回想しているのである。

物腰には、きちんとした規律の裡に何かしら人を親しませるものがあつて、それが私などの様な部外の素人には、海軍と云ふものの一つの味はひである様に思はれるのである。

〔海軍機関学校今昔〕

ただ私は永年の間教師をして、いくつかの学校に關係したが、その中で機関学校が一番好きである。(中略)いい心持でいつ迄も行つてゐようと思つてゐるのに大地震が起こつて、その好きな学校へ行かれなくなつた。

〔山むらさきに〕

思想を語つてゐるのではない。好みを語つてゐるのだ。自己の好みに合つた海軍機関学校を懐かしく回想してゐるだけの作品であり、ここには批評精神は見られないのである。

最初に示した表で、「海軍機関学校今昔」の(○)欄に△印を付しておいたように、この作品では、兵学校の玄関で転ぶ話そのものは語られてはいない。「フロックコート」(その二)における、転ぶ話のプロローグとも言える、宮島からモーターボートで江田島に行つた話だけを描いてゐるのである。舞鶴に移転した海軍機関学校を訪ねて行くための旅程をあれこれ考え、東京から舞鶴まで船で行こうかと考え及び、その連想で、船で江田島を訪ねた思い出を描いてゐるのである。

「山むらさきに」では、「この時の事を記した覚え書は古い著作の中に収めてあるので、詳しい事は省略するが」として、海軍機関学校が同居している兵学校の玄関で転んだ話を描いてゐるのである。転ぶ話それ自体を語る熱意は無いのである。

機関学校の玄関はどちらかと聞き、水兵が恭しく敬礼したのでその機みでこちらの足拍子が浮き、玄関前の石段でのめつて頤に怪我をした。

「ノコリノコらず」よりもさらにあつさり描いてゐるのである。転ぶ話に並列させて、その後で旧知の教官から機関学校が江田島に移転した後の話を聞いたことを語つて、懐かしい機関学校の回想に収斂させてゐるのである。

「新涼談義」は、前述したように、戸板康二との対談である。戸板の「海軍機関学校ですか、先生がお転びになつたのは」という質問に答えて、「フロックコート」(その二)の作品内容を現実の事実として肯定しているのである。(丁)